台大日本語文研究第 46 期
2023 年 12 月，頁 23-49
2023-09-30 收稿，2023-11-20 通過刊登
DOI: 10.6183/NTUJP. 202312_(46).0002

金子光晴的兒童文學作品研究
—以發表於《婦人子供報知》的作品為探討主軸—

洪瑟君*

摘要

金子光晴的兒童文學作品發表於大正 13 年至昭和 18 年間，大多刊載於當時以少年、少女、兒童為主要讀者群的雜誌《少年倶楽部》、《少女倶楽部》及《婦人子供報知》當中。本文聚焦於金子光晴發表於《婦人子供報知》當中的作品，參考雜誌的編輯方針及對照光晴的個人經歷，從「主角人物設定」、「作品主題」及「母親的形象與親子關係」三方面，來探討光晴兒童文學作品的特徵及其創作意圖。

關鍵詞：兒童文學作品、《婦人子供報知》、第一人稱視角、旅遊經驗、母親形象

臺大學術期刊資料庫

* 國立台灣大學日本語文學系副教授

A Study on Mitsuharu Kaneko's Children's Literature Works: Focusing on Works Published in *Fujinkodomohōchi*

Se-Chun, Hung*

Abstract

Mitsuharu Kaneko's children's literature works were published between the 13th year of Taishō era and the 18th year of the Shōwa era. The majority of these works were published in magazines such as *Shōnen Kurabu*, *Shōjo Kurabu*, and *Fujinkodomohōchi*, which targeted teenagers, girls, and children as their primary readership during that time.

This article focuses specifically on Mitsuharu Kaneko's children's literature works published in *Fujinkodomohōchi*. Drawing from Mitsuharu Kaneko's personal experiences and considering the editorial policies of *Fujinkodomohōchi*, this article aims to analyze the characteristics and creative intentions of Mitsuharu Kaneko's children's literature works from three perspectives: "the protagonist's setting," "the theme of the work," and "depiction of mothers and parent-child relationships in the works".

Key words: children's literature works, *Fujinkodomohōchi,* first-person perspective, travel experience, maternal image

臺大學術期刊資料庫

* Associate Professor, Department of Japanese Language and Literature, National Taiwan University

金子光晴の児童文学作品研究
―『婦人子供報知』に発表された作品を中心に―

洪瑟君*

要旨

金子光晴の児童文学作品は、全て大正13年から昭和18年までの期間に発表され、主に『少年倶楽部』、『少女倶楽部』、『婦人子供報知』などの子供向けの雑誌に掲載されている。本稿では特に金子光晴が『婦人子供報知』に発表した児童文学作品を中心に、雑誌の編集方針や光晴の人生体験などを参考にして、「主人公の設定」、「作品の主題」、「作品における母親像と親子関係」の三つの観点から、作品の特徴や光晴の創作意図を全面的に考察する。

キーワード：児童文学作品、『婦人子供報知』、一人称の視点、旅行体験、母親像

臺大學術期刊資料庫

* 国立台湾大学日本語文学科副教授

金子光晴の児童文学作品研究
―『婦人子供報知』に発表された作品を中心に―

洪瑟君

一、はじめに

金子光晴と言えば、「抵抗詩人」「反戦詩人」というイメージが人々に深く印象をつけたのである。生涯ヨーロッパや中国、南洋への豊かな旅行体験を有し、世界各地の実況を身をもって感じた故に、繊細な感情を内包している多彩な詩を多く後世に残した。そのためであろうか、従来の金子光晴の研究については、主に彼の詩作に着目し、詩の趣旨や旅行体験が作品にもたらした影響について分析する論述が多い。詩人に対する研究が詩に注目するのは当然なことだと考えられるが、詩集など成人向けの作品以外に、実は光晴は同じ時期に子供向けの作品を何十篇も書いた。『少年倶楽部』『少女倶楽部』『婦人子供報知』などの新聞・雑誌に子供向けの作品を大量に発表した時期は、恰も長男の出生、婚姻生活の破綻、南洋・ヨーロッパへの放浪、戦争など、光晴の人生で最も波乱万丈な時期と重なっている。その点から考えれば、金子光晴を研究する際には、彼の子供向けの作品に対する研究は無意味ではないと考えられる。しかし、光晴の子供・少年少女を主要な読者に想定された作品群は現在に至っても彼の仕事の傍流と見做されて、研究の焦点として注目されていないと言える。

光晴が子供・少年少女のために書いた作品は大正 13 年から昭和 18 年までの間に発表されており、現在主に『金子光晴全集』（昭和 51 年、中央公論社出版、以下『全集』と略称する）の第 8 巻「童話」、及び第 15 巻「雑纂」に収録されている。『全集』の編集者松本亮がどのような基準によってそれらの作品を分類したかは不明だが、物語、詩、散文など幅広い形式で書かれた子供向けの作品に対して、

臺大學術期刊資料庫

本稿では作品の初出と文体[1]を基準にしてそれらの作品を全て「児童文学作品」と称する。現在『全集』に収録されている既知の児童文学作品は約 60 篇あり、また『全集』の年譜に記載されたが全文収録されていない作品も 8 篇ある。更に当時雑誌に発表されていたが『全集』に収録されていない上に年譜にも記されていないものがあって[2]、原稿だけ残されて未公開な作品もある[3]。全体的に見れば、金子光晴の児童文学作品にはまだ未発見の部分があり、金子光晴研究には深く研究する価値があると考えられる。

二、先行研究について

光晴の児童文学作品についての先行研究は、管見の限り、数えられるほど量が少ない。暮尾淳は『全集』に収録されている子供向けの読み物について分析し、その中の登場人物が皆、「えい知、愛情、勇気、自己犠牲などの徳性をそなえて快活もしくは可憐で爽やかである」と述べ、物語の筋には全て「戦争や権力者の横暴や近しいもののよこしまな心のために、主人公が一度死の危機に瀕しても結局救われる」という特徴があると指摘し、更に西洋を舞台とした光晴の童話の意図が「人間愛の啓蒙」と考えてよいと主張している[4]。暮尾淳の論述に対し、馬渡憲三郎はまず、光晴の童話作品の認定につ

---

1 成人向けの作品と異なり、子供向けの作品は特に「です・ます」調で優しい文体で書かれているため、読者層が明らかに区別できる。但し、昭和 8 年に『少女倶楽部』に発表された「五つの花物語」は光晴の児童文学作品において、唯一「です・ます」調を用いていない作品であることを断りたい。

2 例えば、昭和 13 年に『少年倶楽部』第 25 巻 12 号に発表された作品「見よ、不屈のドイツ魂」（前田均「全集未収録・「反戦詩人」金子光晴の戦争翼賛文――『少年倶楽部』別冊付録所収「見よ、不屈のドイツ魂」」『天理大学学報』186、1997 年 9 月、pp.1-12）や昭和 11 年に『婦人子供報知』138 號に発表された童話「勇将を感激させた母の愛　敵中に只一人我が子を護る」など、まだ多くの子供向けの作品が『全集』に収録されていない。

3 原満三寿の話によれば、当時未公表の「支那名劍武勇傳　一、龍神劍」は講談社の「少年倶楽部」「少女倶楽部」向けの稿料稼ぎの作品の一つであり、1932 年の帰国後から太平洋戦争開戦までの間に完成された作品と推測されている。趙怡は作品の文体が他の子供向けの作品と異なる故、「支那名劍武勇傳　一、龍神劍」が大人向けの作品だと主張している。（趙怡〈金子光晴の未発表作品をめぐって――「支那名劍武勇傳　一、龍神劍。」――〉『比較文学研究』101、2016 年）本稿では、趙怡の主張に従い、「支那名劍武勇傳　一、龍神劍。」を児童文学作品とは見做さない。

4 暮尾淳（1989）「子ども向け読み物について」『金子光晴研究　こがね蟲』3、pp.56-61。

臺大學術典藏利用授權

いて暮尾淳と異なる意見を提出した。次に光晴が童話の「舞台設定や時代設定において、表出しようとしたものは、〈愛国心〉や〈祖国愛〉であり、それを基盤としての〈人間愛〉という主題であ」ると述べ、そしてその主題が「表出されてくる〈時空間〉が〈戦争〉や〈戦場〉でなければならなかったという〈必要性〉」はやむを得ず「時代や社会の〈制約〉」に侵犯された結果だが、〈表現者〉としての責任を光晴に問わなければならないと主張している[5]。また、宮澤賢治は光晴の約 60 篇の童話をその内容によって「場所・人名由緒、起源もの」「自己犠牲的少女もの」「娘（兄弟）二人もの」「忠義もの」「教訓もの、または親孝行もの」「神への礼拝もの」「正義もの」「恩返しもの」「軍人精神もの」「母子愛情もの」「トンチもの」という 11 種類に詳しく分類したが、残念ながら作品の内容についての分析を言及していない[6]。一方、前述した『全集』に収録されている子供向けの作品についての研究に対し、前田均と趙怡が『全集』に収録されていない作品について研究を行った。前田均は光晴が戦時下に『少年倶楽部』の別冊付録に発表した「見よ、不屈のドイツ魂」を戦争翼賛文と見做し、光晴の「反戦詩人」という評価をもう一度検討する必要があると指摘している[7]。趙怡は金子光晴の未発表作品「支那名劍武勇傳 一、龍神劍。」を分析したが、その作品が子供向けの作品ではないと主張し、研究の重点を光晴によって描かれた中国人と龍のイメージの由来を探究するところに置いた。また、論文の第二節に光晴の児童文学作品を触れて、「物語の舞台がほぼ西洋であること」「1937 年前後を境に作品の内容を変化すること」「従来の西洋批判と異なる姿勢を取ること」など光晴の児童文学作品における幾つの特徴を取り上げた[8]。

---

5 馬渡憲三郎（1991）「表現者の責任―金子光晴における「童話」の位置」『國學院雜誌』92(1)、pp.547-561。

6 宮澤賢治（2014）「金子光晴の童話と白秋」宮澤健太郎編『白秋研究資料集成』第 10 巻、クレス出版、pp.52-63。

7 前田均（1997）「全集未収録・「反戦詩人」金子光晴の戦争翼賛文――『少年倶楽部』別冊付録所収「見よ、不屈のドイツ魂」」『天理大学学報』186、pp.1-12。

8 同注 3 前掲論文。

臺大學術期刊資料庫

一方、発表の時期が他の児童文学作品に二年遅れて昭和 18 年に絵本の形で出版された『マライの健ちゃん』は、従来の研究では、主に「大東亜共栄圏」という国策に迎合的な作品と見做されて、反戦・抵抗詩人という金子像への異議申し立ての材料として論じられている[9]。それに対し、中村誠は『マライの健ちゃん』について、「厭戦意識が翻って戦争に一つの効果・意味を求めてしまったとき、アジアへの同化意識が顕在化したのが『健ちゃん』だった」と述べ、「『健ちゃん』という絵物語は半身をアジア民衆の解放に置き、半身を国策と同等の場に置いたテクストだった」と主張している[10]。

上述のように、従来の研究では、前田均の研究以外、全て『全集』に収録されている作品を中心に論じている。しかし、付録の表で示されたように、『全集』に収録されていない作品が現時点で知っている限り、既に 12 篇あり、その中に『婦人子供報知』に発表された作品が 9 篇さえもある。金子光晴の児童文学作品は、絵本『マライの健ちゃん』以外、発表先が主に『少年倶楽部』(講談社)、『少女倶楽部』(講談社)、『婦人子供報知』(報知新聞社)に集中されている。周知のように、『少年倶楽部』と『少女倶楽部』は当時の子供から人気を博し、児童文学の動きには多大な影響を与えた月刊誌である。一方、講談社社長の野間清治は 1930 年 6 月に『報知新聞』を買収して、雑誌販売の定石である「大付録作戦」を『報知新聞』に導入し、週刊『日曜報知』と隔週誌『婦人子供報知』を定期購読者に無料配布した。『少年倶楽部』と『少女倶楽部』だけでなく、同じく野間清治が社長を兼任する講談社内で編集された『婦人子供報知』も、1930 年代の「非常時」において日本の大衆文化に大きな影響を与え、特に女性や子供に対してその影響力は顕著であった。それ故、本稿では、特に『婦人子供報知』に発表された作品に焦点を当て、『全集』

9 例えば、鶴岡善久「離反と放擲――金子光晴の〈責任〉、その他」(『現代詩手帖』38、1995 年 3 月)、櫻本富雄『探書遍歴　封印された戦時下の文学の発掘』(新評論、1994 年)などがある。

10 中村誠(2006)「金子光晴における〈反帝国主義〉と〈大東亜共栄圏〉――「鮫」から『マライの健ちゃん』へ――」『昭和文学研究』52、p.71。

に収録されていない作品を含めて、光晴の児童文学作品の特徴を分析したい。

三、金子光晴の児童文学

金子光晴の児童文学作品は、昭和18年に出版された絵本『マライの健ちゃん』以外、全て大正13年から昭和16年までの期間に発表されており、発表先が主に『少年倶楽部』、『少女倶楽部』、『婦人子供報知』といった子供向けの雑誌に集中されている。作品の内容から見れば、童話が大多数を占め、次が紹介文であり、詩人光晴が得意な詩は意外に少ない。また、童話の舞台は概ね西洋に設定され、日本や中国を舞台にしたものが僅かである。紹介文の場合は、世界各地の児童の生活や各地の見聞、異聞、珍妙なことを紹介するものを中心としている。

（一）『婦人子供報知』との関わり

『婦人子供報知』（b5 判・月二回発行）は昭和 6 年に報知新聞社に創刊された「報知新聞」の無料付録雑誌である。昭和 6 年 3 月 11 日に発刊した第 1 号から昭和 12 年 2 月 28 日に発行した終刊号まで総計 143 号が発行された。『婦人子供報知』の創刊号に、報知新聞社長・野間清治は「創刊の辞」において下記のように宣言している。

> （前略）家庭の内容は主として母、妻、子供の三者である。これ等の人々に少しでも為になることが、世の中を明るくし、正しくし、美しくする為の最善の努力であると私は確信する。
>
> 不景気を直すのも、思想を善くするのも、道徳を振興するのも、本筋は何といっても教育問題で就中効力の著大なるは家庭教育である。吾等の新たに計画した『婦人子供報知』形は小さく、頁は薄くとも、期する所は高く且つ大きい。（後略）[11]

つまり、「創刊の辞」に掲げられた「『子供』は御国の宝である」「『母』は世の母である」「『妻』それは全社会の半分である」という野間社

臺大學術期刊資料庫

[11] 『婦人子供報知　復刻版』第 1 巻、柏書房、2019 年、p.7。

長の言葉のように、『婦人子供報知』は主な読者層が女性と児童に想定されて、「母、妻、子供の三者」をターゲットとした雑誌である。

既に前述したように、『婦人子供報知』の刊行時期（1931年3月～1937年2月）はちょうど満州事変の半年前から日中戦争の半年前までをカバーしており、1930年代の「非常時」と重なっている。但し、「家庭雑誌」という性格のため、時局に関連した読み物も存在しているが、『婦人子供報知』では軍国色はさほどに目立たないと言われている[12]。『婦人子供報知』の刊行時期において光晴が発表した30篇の児童文学の中に、『婦人子供報知』に掲載されたのは14篇もあり、凡そ総数の半分を占めている。反戦詩人として知られている光晴が、この時期に執筆した児童文学作品を主に『婦人子供報知』に発表したことは、雑誌の性格と関連している可能性が高いと考えられる。一方、14篇の作品の中に、「慈愛のバイオリン」（昭和9年）と「忠犬フィリップ」（昭和10年）2篇は『全集』の第8巻〈童話〉の項目に収録されており、「親切なフランス少年」（昭和7年）、「学問の好きなドイツ少年」（昭和7年）、「イギリス少女の機智」（昭和8年）3篇は『全集』の第15巻〈雑纂〉の項目に収録されている。また、筆者の調査によると、「瑞西の少年」（昭和7年）、「勉強を怠らないイギリスのお母さん、公平なフランスのお母さん」（昭和8年）、「無駄の大嫌ひな女中さんの話」（昭和8年）、「フランスの少女」（昭和8年）、「世界で一番寒い國に住んでいる子供たち」（昭和8年）、「鰐を釣るアフリカの子供」（昭和9年）、「古本屋の主人」（昭和9年）、「チモール島の日本人酋長」（昭和11年）、「將を感激させた母の愛　敵中に只一人我が子を護る」(昭和11年)の9篇の作品が『全集』に収録されていないことが分かった。

（二）〈私〉を主人公とする作品

光晴の児童文学作品の中で、特に昭和７年から昭和８年にかけて発表された作品は、他の時期の作品とは明らかに異なる特徴を持っ

臺大學術期刊資料庫

[12] 佐藤卓己（2019）『昭和戦前期報知新聞付録集成『婦人子供報知』【復刻版】解題』柏書房、p.6。

ている。具体的には、これらの作品では、主人公が全て一人称の〈私〉として描かれ、物語の舞台は主にヨーロッパのある場所に設定されている。そして〈私〉が現地の少年や少女たちと出会い、彼らとの交流を通じて、彼らの親切さ、勤勉さ、向学心、機知、勇敢さなどの美徳を称える内容となっている[13]。

光晴は生涯でヨーロッパ旅行の経験が二度ある。一回目は大正 8 年 2 月から大正 9 年 12 月中旬までの期間に、イギリス、ベルギー、フランスなどの国を巡る旅行体験であり、二回目は昭和 3 年 9 月から妻の森三千代と一緒に行った無謀な放浪の旅であった。二回目の旅では、光晴は往路と復路の途中で南洋を経由し、辛うじて旅費を稼ぎながら旅を続けた。そのため、実際にヨーロッパに滞在していた期間は昭和 5 年 1 月から昭和 6 年 10 月までであり、主にフランス、ベルギーなどの国を巡ってきた。光晴の二度の渡欧体験を比較すると、初めての旅行が彼を西洋文化に目を開かせ、視野を広げることに寄与した一方、二度目の旅行は現実的な面で彼の西洋憧憬に非常に強い衝撃を与えたと言える。

> 巴里の二年間は、まったく痩せた。無一物の日本人が巴里でできる限りのことは、なんでもしてみた。しないのは男娼だけだった。(中略)あの二年間は、どうにも住み心地がわるかった。(中略) 僕は、いつ日本へかえれるかわからなかった。おそらく、死ぬまでダメだろうとおもっていた。日本が好きというわけでもないのに、やっぱり、かえれないとなると侘しかった。それに、欧羅巴の貧乏ぐらしは、つくづくいやなものだった[14]。

上記の引用文からは、二回目のヨーロッパ体験が光晴にとって如何にも貧乏で不愉快だったことが窺える。前述した第一人称の〈私〉で語った作品は全て二回目のヨーロッパ旅行が終わって帰国した後

[13] これらの作品は殆ど『婦人子供報知』に発表されている。また、同じ時期に『少年倶楽部』に発表された作品「ベルギーの少年」(昭和 7 年) と『少女倶楽部』に発表された作品「五つの花物語」(昭和 8 年) も同じ特徴を持っている。

[14] 「世界の貧民窟を行く」『金子光晴全集』第 8 巻、中央公論社、1976 年、pp.376-377。

臺大學術期刊資料庫

書かれたものであるが、作品中に溢れているヨーロッパに対する好意や作品における「小学生徒が軍歌を口笛で吹きながらやってきました」[15]、「この勇気がヨーロッパ大戦の時、大敵ドイツにむかって、ベルギーをあんなに強くさせたのだということがわかりました」[16]、「私があちらに行っていた頃は、ドイツは、フランスやイギリスなどに、年々莫大な賠償金を払っていました」[17]といった描写から、それらの作品は光晴が一回目の渡欧体験に基づいて書いたものと推測できる。第一次世界大戦の終戦後に調印されたヴェルサイユ條約によって、敗戦国のドイツは莫大な賠償金を支払わなければならなかった。光晴が描いた作品は、戦後の余波に影響を受けたヨーロッパ各国の現状を反映している。時間的にも、光晴の一回目のヨーロッパ体験と一致しており、作品の中の前向きで積極的な描写も光晴当時の心境にぴったり合っていると言える。

光晴の最初の児童文学作品は、大正 13 年 7 月に『少女倶楽部』に掲載された少女詩「蘭の花」であった。それから半年後の大正 14 年 1 月には、詩「凧」が『少年倶楽部』に掲載された。その後、光晴は昭和 16 年まで継続して児童文学作品を発表し、80 篇以上の作品を執筆した。先行研究では、光晴が貧窮のゆえに童話を書いて生計を立てていたと指摘されているが、実際にはモンココ化粧品本舗での宣伝関係の仕事を得て、月給五十円を受け取るようになったため、昭和 7 年 9 月から光晴の生活が一応安定したと言える。そのため、彼が児童文学に目を向けた理由は単に原稿料を稼ぐためだけではないと考えられる。実際に光晴の年譜と照らし合わせると、光晴が大正 13 年 7 月に妻の三千代と結婚し、その後間もなく三千代の妊娠が分かり、そして大正 14 年 3 月に長男の乾が生まれた。この状況から見れば、長男の出生によって光晴は経済的な面において収入源の

15 「親切なフランス少年」『金子光晴全集』第 15 巻、中央公論社、1977 年、p.299。
16 「ベルギーの少年」同注 15 前掲書、p.302。
17 「無駄の大嫌ひな女中さんの話」『婦人子供報知』第 50 号、昭和 8 年 4 月 12 日、p.32。

臺大學術期刊資料庫

多様化を模索せざるを得ない窮地に追い込まれたが、創作のスタイルを児童文学の範疇に広げていくことで、父親としての光晴の子供に対する愛情と期待も感じられるのである。戦時中、息子の乾が召集されないように、乾を松葉でいぶし喘息の体にみせかけ、医師ににわか作りの診断書を書かせて入営を回避させた。国のために出征する我が子に対して光栄を感じ、万歳三唱して戦地に送り出さなければならない時代において、そのような行為は世間の目を気にせずに自分の子供を守ろうとする父親としての勇気と息子への愛情が感じられる。

前述した一人称の〈私〉で書いた作品が集中的に発表されたのは昭和 7 年から 8 年までの間であり、ちょうど光晴が二度目のヨーロッパ旅行を終えて日本に帰国した時期でもある。昭和 3 年に、経済的な不安定さと妻三千代との夫婦関係の破綻が重なった難局を打開するために、長男の乾を三千代の実家に預け、四年間の放浪の旅を始めた。光晴が日本を離れた時、乾はただ三歳であった。再び日本の国土に立って自分の息子に会った時、当時の乾は既に少年に成長していた。作品の中では、光晴は意図的に一人称の〈私〉を主人公として設定し、ヨーロッパ各国の少年や少女たちと交流する。このような設定により、〈私〉と少年・少女たちとの距離を近づけ、物語の内容により一層真実性や臨場感を与える一方で、光晴の当時の心境も反映されていると考えられる。即ち、「〈私〉(光晴)」と「少年・少女(乾)」との交流を描くことによって、自分と息子との距離を縮めようとする一方で、作中の〈私〉が少年や少女たちを評価し賛美することで、乾が親切さ、勤勉さ、向学、機知、勇敢さなどの美徳を持つ少年に成長してほしいという期待を込めているのである。

(三) 作品の主題

光晴の成人向けの作品には、詩だけでなく紀行文や自伝などの散文も多く含まれている。彼は生涯を通じて豊かな旅行経験を積んでいたため、自身の旅行体験を基にした作品が多くある。一方、光晴は世界各国の風物や民情、珍奇な出来事に非常に興味を持っていた。

臺大學術期刊資料庫

『富士』誌に掲載された「世界見世物づくし」（昭和 3 年 9 月）と「世界見世物づくし（2)」（昭和 4 年 6 月）において、光晴はフランス、ドイツ、インド、ペルシア、中国、トルコ等世界各地の奇聞逸話を描き、スペインの煙術師や、奇妙なジプシー、イタリアの手品師など、鮮やかな腕前を持つ人々を生き生きと描写した。「世界見世物づくし」には、光晴が実際に訪れたことのない国の話も含まれている。そのため、彼は旅先での経験を文章にするだけではなく、想像力を駆使して創作も行ったと言えよう。実際の体験に基づく文章にせよ、空想による創作にせよ、光晴の作品では世界各地の奇聞や逸話、外国の見聞を紹介することは頻繁に出現する主題と考えられる。

光晴の児童文学作品でもその傾向が反映されており、80 篇以上の作品のうち、日本国内を舞台にしたものは極めて少ないである。殆どの作品は外国を舞台にし、ヨーロッパから世界各地に広がる広範な地域で展開されており、外国の要素が豊かに盛り込まれている。例えば、昭和 3 年 5 月に『少女倶楽部』に発表された「燕のおみやげ」では、光晴は南から大海原を越えてきた燕たちの会話を通して、ジャバの熱帯風景、セイロンのお寺の塔、ハワイ島の漁村に住む少女の話など、世界各地の面白いお土産話を語った。また、光晴は昭和 8 年 12 月に『婦人子供報知』に掲載された「世界で一番寒い国に住んでいる子供たち」で、グリンランドにおけるエスキモーたちの日常生活を紹介し、更に昭和 9 年 5 月に発表した「鰐を釣るアフリカの子供」で、アフリカの子供がどのように鰐を捕まえるのかを描いた。それらの作品を通じて、彼は日本の子供たちに異国の人々の生活や冒険について紹介しているのである。勿論、光晴は実際にグリンランドやアフリカに行ったことはなかった。彼の子供向けの作品にも、成人向けの作品のように世界各地の異文化に強く惹かれ、それを自身の作品に取り入れた傾向が見られる。光晴の児童文学作品は、成人向けの作品の延長線上にあり、ただ子供たちが理解しやすい表現や内容に変えられている点が異なると言える。

臺大學術期刊資料庫

一方、光晴の児童文学作品には伝統的な子供向けの読み物の特徴が保たれている。例えば、「燕のおみやげ」の最後に、「皆さん。正直で、慈悲深くて、やさしいいゝお嬢さんになって、燕たちからもほめてもらいましょうねえ」[18]というような、道徳的な教訓や価値観が述べられている。同様に、「世界で一番寒い国に住んでいる子供たち」の文末でも、「皆さん、エスキモーのやうに早起をしませう。いぢけずに着物をきかへませう。さうして、エスキモーの子供のやうに、寒さなんかこはがらない子供になりませう」[19]と、子供たちに健康的な生活習慣を身につけるよう呼びかけている。光晴は作品中に外国の風物や習慣を紹介した後、しばしば教訓の意味を含める言葉を付け加えている。その描写手法によって、子供たちに外国の良い点を学ばせるだけでなく、通俗性と娯楽性を保ちつつ、雑誌の方針である児童教育を重視する目的も達成したと考えられる。

（四）作品中における母親像と親子関係

金子光晴の年譜によると、光晴が三歳の時、実父母は貧困のため、口減らしのつもりで光晴を金子家の養子にやることにした。養子として金子家に迎えられ、光晴は放蕩で通人ぶった養父と我儘で未熟な養母とに挟まれ、刺激の強い幼年期を過ごした。一方、実父母は朝鮮、満州までも放浪し、二十年間一度も光晴を訪れてこなかったが、光晴が二十二歳の時、弟と幼い妹を連れて突然彼の目の前に現れた。光晴は晩年自らの人生を振り返って書いた作品「母の像――二人の俤」では、自分の生母と養母に対する複雑な感情について次のように述べている。

> そして僕としては、どちらの母にも、心から甘えることができなかったし、おおかたの人生がすぎてしまったいまになって、さて、どちらの母によりふかい愛着があるかと眼をつぶってみても、涙にうるんであらわれてくる母の俤というものは、その

[18] 「燕のおみやげ」、同注 14 前掲書、p.111。
[19] 「世界で一番寒い国に住んでいる子供たち」『婦人子供報知』67 号、昭和 8 年 12 月 24 日、p.21。

臺大學術期刊資料庫

どちらでもない[20]。

この描写からは、光晴が成長期において母親からの愛情を感じることができなかったため、彼にとって母親のイメージは非常に抽象的で曖昧なものだったと推察できる。

そのためであろうか、全体的に見れば、光晴の児童文学においては、母親を描写する作品が少ないという傾向がある[21]。その中に、童話「母をたずねて」は、昭和7年に『少女倶楽部』に発表された作品である。物語は、六歳の少女ポレットと愛犬ポアンが駅で迷子になり、母親と離れ離れになったという出来事から始まる。その後、ポレットは漁師のお爺さんに引き取られ、お爺さんが亡くなった後、ポアンを連れて曲馬団と一緒にヨーロッパを巡りながら母親を探す旅に出る。そして、八年後にようやく母親と再会するという結末である。母親を訪ねるという主題の物語とは言え、物語の内容は、ポレットと母親との愛情より、寧ろポレットとポアンとの絆やポアンの忠誠心に焦点が当てられて描写されている。作中の母親が自分の娘を見失ったことを覚悟してからの反応について、光晴は只「お母さまは、くる日もくる日も涙でお送りになりました。笑顔というものが永遠に、このお母さまの顔から亡びてしまったのではないかと思われるほどでありました」[22]と一言で母親の心境を形容し、八年後の親子再会の場面についても、「ポレットとお母さんは、感動のあまり、もう、なにもいうことができなくなって、抱きあったまゝでした」[23]と簡潔に描いただけである。お母さんを探している途中、曲馬団の親分に怖い顔で鞭を振りあげられていっそ死のうと思っている時、ポレットを支えてくれたのはポアンであった。「老犬ポアンの

[20] 「母の像――二人の俤」、同注14前掲書、p.557。
[21] 現在知られている81篇の作品の中で、「母」という言葉が題名に用いられ、かつ内容に母親に関連する描写があるのは、「母をたずねて」「勉強を怠らないイギリスのお母さん、公平なフランスのお母さん」「勇將を感激させた母の愛　敵中に只一人我が子を護る」「ガリバルヂイと母」「母は強し」の5篇のみである。また、「慈愛のバイオリン」では特に母親について詳しく描写されていないが、母親は両親として登場している。
[22] 「母をたずねて」同注14前掲書、p.149。
[23] 同注22、p.153。

頭をしずかに撫でてやりながら、浜の一軒家のお爺さんとのたのしい生活をおもい出している時だけが、ポレットにとって、なにより幸福な時間だった」[24]という描写のように、厳しい現実生活の中で、ポレットの精神的な支えとなったのは母親との再会への強い信念ではなく、むしろポアンとの絆やお爺さんとの思い出が強調されている。物語の最後にポレットが母親と再会する場面では、ボアンが母親の姿を見つけて必死に追いかけ、そして母親がポレットに犬と少女の名前を尋ねることによってお互いの関係を確認したという意外な展開が描かれている。物語全体を通じて、母親像は曖昧で抽象的であり、母親と少女との感情に関する描写が乏しく、更に親子関係の疎遠さを感じさせるという特徴が窺える。

一方、「ガリバルヂイと母」は、昭和 14 年に『少女倶楽部』に発表された物語で、イタリアの将軍ヂュゼッペ・ガリバルヂイの子供時代を描いている。物語では、心優しい少年ヂュゼッペが友人たちに弱虫と揶揄われる日々を送っている。ある日、海岸で遊んでいる中で、溺れかけている女性をヂュゼッペが勇敢に救助する。この行為により、ヂュゼッペを揶揄していた人々はいなくなり、ヂュゼッペは近所の人々から小さな英雄として尊敬されるようになったという内容である。光晴は作品の中で、ヂュゼッペの情け深い心が母親の感化を受けたと書き、ヂュゼッペの母親を次のように描写した。

> お母さんは、子供を大そう可愛がり、貧乏な人たちや不仕合せの人々にはあわれみぶかく、いろいろなものを惜しげもなく施して助けてやりました。家の仕事をすました後で、ひまがありますと、病気をしている人達を見舞って、そのそばで、しんせつに、看病してやり、出来るだけ力をつくし、またよくなぐさめてやるのでした。それですから、近くの村人からは、慈悲の母のように敬われ、慕われておりました[25]。

このような優れた母親がいたからこそ、ヂュゼッペは立派な人間に

[24] 同注 22、p.151。
[25] 「ガリバルヂイと母」、同注 14 前掲書、p.227。

臺大學術期刊資料庫

育てられ、最後にはイタリアの英雄として知られるようになった。ヂュゼッペの母親に対する描写からは、自分の子供を愛情深く可愛がりつつ、他人にも熱心に助ける慈悲深い母親の姿が浮かび上がるのである。そして物語の最後で、ガリバルヂイ将軍は自分の母親について次のように述べた。

> 私の母は、世の婦人達のもっともよいお手本であったと誇をもって断言いたします。どの子供でもその母のことをそう言わなければならないのです。しかし、私は、自信をもって、自分の母のことを言いうる者と、誰よりも信じます[26]。

ガリバルヂイ将軍の話を通じて示されたように、このような慈愛に満ちた母親像は世の婦人たちの手本として考えられ、理想的な母親像とも言える。しかし一方、作品の内容を見ると、「ガリバルヂイと母」というタイトルの物語にもかかわらず、意外なことにヂュゼッペと母親の交流や会話などの描写が皆無であり、将軍が人前で母親について語り、目に熱い涙が溢れるという簡潔な描写だけで二人の親子関係が表現されている。全体的に言えば、親子の間に存在すべき愛情の表現が乏しく、読者に感動させるような緊密な親子関係の描写が欠けていると言える。

また、昭和9年9月に『婦人子供報知』に発表された「慈愛のバイオリン」はオーストリアの音楽家のストラウスを描いた物語である。ストラウスの両親は、日々非常に貧しい生活を送っていたが、少なくともクリスマスの夜には子供の夢を叶えようと考え、寒い天候の中、お父さんの外套と古いバイオリンを交換し、それをストラウスに贈った。古ぼけたバイオリンでも、ストラウスは才能を発揮して美しい音色を奏でて近所の人々を魅了した。そして二十年後、ストラウスは既にヨーロッパで最も有名な音楽家となり、ロシアの皇帝からモスクワに国賓として招かれた。皇帝の前で、彼はその破れた古いバイオリンで見事に名曲を演奏した。そして、「このバイオ

臺大學術期刊資料庫

[26] 同前注、p.228。

リンについての、お父さんお母さんの愛の思い出話を皇帝に申しあげた時、宮中の文官武官並みいる人たちは、感激のあまり泣かない者はなかった」[27]という描写で物語は終わった。この作品では、ストラウスの母親について詳しく描写されていないものの、彼女の堅忍な母親像は明確に示されている。貧しい状況や困難な環境の中で、両親は自己犠牲を厭わず、子供の夢を叶えるために努力した。このような親の愛情と犠牲は物語の中で強調されているのである。一方、「慈愛のバイオリン」では、母親が子供に対する愛情が描かれ、理想的な母親像が示されているが、子供が母親に対する感情の描写は触れられていない。前述した童話「ガリバルヂイと母」と同様に、物語の最後で主人公が他人に母親の愛を伝え、周囲の人々が感動の涙に包まれる（「ガリバルヂイと母」では主人公自分が感動の涙を流す）という描写があり、その簡潔な描写によって子供の母親への思いを曖昧に表現した。この描写手法を通して、作者の光晴が親子の間に存在するべき親密さやお互いの直接的な感情表現に関する描写をできるだけ避けようとする意図が窺える。

また、光晴が昭和 11 年 12 月に発表した「勇将を感激させた母の愛　敵中に只一人我が子を護る」は勇敢な母親を描写している物語がある。この物語は、敵軍に侵略され、住民が皆逃げ去った小さな村を舞台にしている。重病の息子を看病するため、白髪の老婆が独自に村に残り、敵軍が家に入るのを恐れることなく阻止する。敵軍の大佐は母親の愛に感動し、部下に老婆の家に入ることを禁じ、更に看護卒の二人に瀕死の息子の看護や手伝いをするように命じた。この物語の最初に、回想の形で大佐がその時のことを次のように述べている。

> 僕は、若い時から随分無鉄砲な人間で、怖しいことでも何でも、人にひけを取ることを知らなかつたが、あの時ばつかりは、どういふものか、人間以上の人間の恐ろしい、力に壓伏されて、

臺大學術期刊資料庫

27 「慈愛のバイオリン」、同注 14 前掲書、p.164。

身うごきが出來ない感じだつた[28]。

白髪だらけの母親は我が子を守るために、敵軍の襲撃を恐れずに、平然と敵軍に自分の家を離れるように要求した。母の強い愛の力は百万の敵も恐れぬ激しさがこもっており、その偉大な母の愛に直面した大胆不敵な大佐も屈するしかできなかった。この物語では、光晴は子供を守るために自己犠牲を惜しまない立派な母親像を描き出した。彼女は自分自身の幸せや安全よりも子供の幸福を優先し、必要な場合には困難や危険に立ち向かう覚悟を持っている。作品における母親の深い愛情は、光晴が母親としての役割に対する理想と期待を反映していると言えよう。

一方、「勇将を感激させた母の愛　敵中にただ一人我が子を護る」では、息子が重病で命に危機が迫っているため、実質的に息子が不在に等しい状態となっており、母親に対する愛情を表す表現は当然描かれていない。しかし、物語中の子供が存在するか否かに関係なく、光晴が母親を中心に描いた童話において、親子の愛情表現は常に母親から子供へという一方的なものであり、双方向のものではないと言える。このような親子関係の描写は、光晴自身の出生背景に由来するものと推測できる。幼少期に里子に出され、自分の生母に二十年間も会ったことがなく、養家でも家庭の温かさを感じることができなかったため、光晴は親子の感情表現に対して不慣れであり、子供が母親に対する親しい仕草や思慕の情を深く描写することもできなかったと考えられる。

更に、幼少期の経験によって光晴は「母親」という存在に複雑な感情を抱いている。彼は母親に対して不信や愛憎の念を抱きながらも[29]、同時に母親からの愛を期待し渇望していた。

---

[28] 「勇将を感激させた母の愛　敵中に只一人我が子を護る」『婦人子供報知』138号、昭和11年12月13日、p.36。

[29] 原満三寿は光晴の母親に対する気持ちについて、次のように論じている。「光晴は、実母からも養母からも普通の口唇性欲の満足を得られなかったために、母親に学習させられるアイデンティティの物語から免れた。更に、幼時から女装をさせられたことが、彼の性の意識が歪ませられるきっかけとなった。そして母親ばかりではなく女性すべてに対する抜きがたい不信、複雑でエキセントリックな愛憎を助長した。」（原満三寿『評伝　金子光晴』北溟社、2001

母親のない子供ほどみじめで、物あわれなものはない。母親なしで大きくなる子供は、焼け野原を駆け廻っているのとおなじである。誰も、その代わりになってくれるものはない。乳を飲みながら死んでゆく子供は、まだしも幸福である[30]。

「母親より強いものはない」という文章において、光晴は母親という役割の重要性を説き、母親に対する渇望を強く表現している。母親の愛を強く求めていた光晴は、児童文学作品を通して、自分の理想的な母親像を描いていたと思われる。

童話作品で描かれた母親像に加えて、昭和 8 年 1 月に『婦人子供報知』に発表された「勉強を怠らないイギリスのお母さん　公平なフランスのお母さん」という作品では、光晴は特にヨーロッパで出会った当地の母親たちの言動について言及している。フランスのお母さんは、子供たちが喧嘩している時には、まず喧嘩の理由を確かめてから公正な判断を下す。そして、決して自分の子供を偏った特別な扱いをすることはない。また、イギリスで出会ったある母親は、毎日子供たちを学校に送り出した後、独力で難しい平面幾何学を勉強している。その理由は、子供たちを立派な紳士に育てるためであり、立派な紳士の母親が文盲であってはならないと考えているからである。光晴はイギリスのお母さんの厳粛な態度に感心しており、フランスのお母さんの公平的なやり方にも賛美している。光晴は作品では自分なりの方法で母親像を表現している。作品の中に、様々な母親の姿が描かれており、それを通じて光晴が思い描いていた理想的な母親像が見られる。一方、『婦人子供報知』は婦人と子供を主要な読者層として発刊された「家庭雑誌」であり、家庭教育の重要性を強調している。光晴はこの編集方針に従い、公平なフランスの母親の姿や勉強を怠らないイギリスの母親の言動に焦点を当てることで、日本の婦人たちにも模範的な母親像を提示したと考えられる。

臺大學術期刊資料庫

年、p.32。）

30 「母親より強いものはない」『金子光晴全集』第 12 巻、1975 年、p.411。

四、結び

本稿では、金子光晴が『婦人子供報知』に発表した児童文学作品を中心に、主人公の設定、主題、母親像と親子関係の三つの面から作品の特徴や光晴の創作意図を全面的に考察した。その結果、金子光晴の児童文学作品において、彼の人生体験や旅行体験が作品の内容に反映されていることが明らかになった。成人向けの作品の延長線として、彼は児童文学作品に世界各地の奇聞や逸話、外国の見聞を主題として取り入れていた。また、作品中の主人公〈私〉が西欧の少年少女と交流し、彼らの美徳を称える描写手法には、自分と息子との距離を縮めようとする意図や息子に対する期待が含まれていると考えられる。さらに、光晴の生い立ちと合わせて考えると、母親との関係が作品中の母親像と親子関係の描写に影響を与えた可能性が高く、彼が描く立派な母親像は、光晴の母親への期待と理想的な母親像を示していると考えられる。

一方、『婦人子供報知』に発表された児童文学作品には、伝統的な子供向け読み物のように教訓の要素が導入されていることがある。また、作品中に理想的な母親像を描き、日本の婦人たちに模範となる母親像を示す傾向も見られる。これは発表誌の『婦人子供報知』が家庭雑誌の性格を持ち、家庭教育や児童教育の重要性を強調していたためだと考えられる。

しかし、『婦人子供報知』以外、光晴の大多数の児童文学作品は『少年倶楽部』『少女倶楽部』に発表した。同じく講談社の社長野間清治のもとで編集された雑誌とは言え、雑誌の主要読者層の相違によって編集方針もやや異なっているのである。更に、昭和12年に日中戦争が勃発し、翌年「児童読物改善に関する指導要綱」が実施された。時局下の光晴の児童文学は、どのような様態で小さい読者の前に呈されていたのか。また、雑誌の編集方針や時代背景の影響のもとで、光晴はどのように自分なりの児童文学作品を創作したのか。

> これら（筆者注――童話）のすべては今日まで一般的にはほとんど知られずにきた金子光晴の一面だが、貧窮の大正末、昭和

臺大學術期刊資料庫

の初め、また長い放浪とそのあとの一時期に、糊口をしのぐためとはいえ、稚く心定まらぬ小さい者への繊細な文字の贈物は、今後金子光晴を語るための好個の読物となるにちがいない[31]。

『全集』の編集者である松本亮の言ったように、金子光晴の作家研究においては、彼の児童文学は無視できない重要な資料である。光晴の『少年倶楽部』『少女倶楽部』に発表された児童文学作品については、今後の課題として研究し続けていきたいと思う。

【付記】本稿は第 14 回東アジア人文学フォーラム「ポストコロナ期における東アジア人文学―発展と展望―」（2022 年 12 月 11 日、早稲田大学総合人文科学研究センター主催）で口頭発表した「金子光晴的兒童文學作品研究」を基に大幅に改稿したものである。口頭発表及び論文審査の際に、貴重なご意見をくださった先生方に深く御礼を申し上げる。なお、本稿は国科会専題研究計画「金子光晴的童話研究（金子光晴の童話研究）」（MOST 111-2410-H-002-186-）の研究成果の一部である。

（表）金子光晴の児童文学作品

◎『金子光晴全集』第 8 巻［童話］に収録されているもの。（全文収録）

臺大學術期刊資料庫

31 松本亮「後記」、同注 14 前掲書、p.573。

○『金子光晴全集』第 15 巻［雑纂］に収録されているもの。（全文収録）

◇『金子光晴全集』第 15 巻［年譜］に記されているもの。（作品名のみ）

△『金子光晴全集』に未収録

※重複

番号	發表時間	發表先	作品名	注記
1	T13.7	少女倶楽部	少女詩　蘭の花	◇
2	T14.1	少年倶楽部	凧	◇
3	T14.2	少年倶楽部	故郷の友へ	◇
4	T14.3	少年倶楽部	僧正と鼠	◎
5	T14.5	少年倶楽部	ノートルダムの曲芸師	◎
6	T14.6	少女倶楽部	テニスのボール	◇
7	T14.8	少年倶楽部	愛の勇将	◎
8	T14.9	少女倶楽部	母校	◇
9	T15.2	少女倶楽部	嵐の夜	◎
10	T15.3	少年倶楽部	母校	◇※
11	T15.11	少年倶楽部	なげきの槍	◎
12	S2.6	少女倶楽部	青葉の笛	◇
13	S2.9	少年倶楽部	アッチラの馬	◎
14	S2.10	少年倶楽部	燕王軍をかへす	◇
15	S2.11	少年倶楽部	霧	◎
16	S3.1	少年倶楽部「付録」	二人の脱退兵	◇
17	S3.2	少年倶楽部	正義は勝つ	◎
18	S3.2	少女倶楽部	あゝ祖国	◎
19	S3.2/14 ～17	上毛新聞	沈毅なるホルマン	◎

臺大學術期刊資料庫

20	S3.5	少女倶楽部	燕のおみやげ	◎
21	S3.7.27 ～ 29	上毛新聞	偉くなった日の出松	◎
22	S3.10	少年倶楽部	黒い下士官	◎
23	S3.10	少女倶楽部	オスタンの暁	◎
24	S3.11	少女倶楽部	黄菊姫、白菊姫	◎
25	S3.12	少年倶楽部	名剣旭丸	◎
26	S4.11	少女倶楽部	オランダの母	◎
27	S6.1	少女倶楽部	愛の旗じるし	◎
28	S6.2	少女倶楽部	リュクサンプール公園の少女	◎
29	S6.7	少女倶楽部	笑いナンネット	◎
30	S6.8	少女倶楽部	ミチィの動物園	◎
31	S7.9	少女倶楽部	白いお皿	◎
32	S7.9.28	婦人子供報知	親切なフランス少年	○
33	S7.10.12	婦人子供報知	瑞西の少年	△
34	S7.10.26	婦人子供報知	学問の好きなドイツ少年	○
35	S7.12	少女倶楽部	母をたずねて	◎
36	S7.12	少年倶楽部	ベルギーの少年	○
37	S8.1.11	婦人子供報知	イギリス少女の機智	○
38	S8.1.25	婦人子供報知	勉強を怠らないイギリスのお母さん、公平なフランスのお母さん	△
39	S8.4.12	婦人子供報知	無駄の大嫌ひな女中さんの話	△
40	S8.6.14	婦人子供報知	フランスの少女	△
41	S8.9	少女倶楽部	五つの花物語	○
42	S8.12	少年倶楽部	熊の家	◎

臺大學術期刊資料庫

43	S8.12	少女倶楽部	花つくり	◎
44	S8.12.24	婦人子供報知	世界で一番寒い國に住んでいる子供たち	△
45	S9.1	少女倶楽部	大砲の献金	◎
46	S9.3	少年倶楽部	ロバンソンの森	◎
47	S9.5.13	婦人子供報知	鰐を釣るアフリカの子供	△
48	S9.8.12	婦人子供報知	古本屋の主人	△
49	S9.9.23	婦人子供報知	慈愛のバイオリン	◎
50	S10.3	少年倶楽部	デンマークの小学生	○
51	S10.4.28	婦人子供報知	忠犬フィリップ	◎
52	S10.6.16	国民新聞	梅雨と子狸	◎
53	S10.8	少女倶楽部	セシル姫	◎
54	S11.2	少年倶楽部	王様の机	◎※
55	S11.11	少女倶楽部	エチオピヤの黒鷲	◎
56	S11.11.12	婦人子供報知	チモール島の日本人酋長	△
57	S11.12.13	婦人子供報知	勇將を感激させた母の愛 敵中に只一人我が子を護る	△
58	S12.1	少年倶楽部	無言の勇者	△
59	S12.4	少年倶楽部	王様の机	※
60	S12.7	少年倶楽部	最後の教訓	◎
61	S12.8	少年倶楽部	馬にへこまされたオランダ人	◎
62	S12.10	少女倶楽部 ［増刊号］	黙りん坊	◎
63	S13.2	少女倶楽部	モンマルトルの愛国少女	◎
64	S13.4	少女倶楽部	妹よ、いずこ	◎
65	S13.6	少年倶楽部	俺は日本人だ！	◎

臺大學術期刊資料庫

66	S13.7	少年倶楽部	可愛い手の水	△
67	S13.10	少年倶楽部［付録］	見よ、不屈のドイツ魂	△
68	S14.1	少女倶楽部	鳩	◎
69	S14.2	少女倶楽部［増刊号］	山の子守唄	◎
70	S14.2	少女倶楽部［増刊号］	裏街の薔薇	◎
71	S14.2	少年倶楽部	愛馬の勲章	◎
72	S14.3	少女倶楽部	ガリバルヂイと母	◎
73	S14.3	少女倶楽部	ニオノ姫	◎
74	S14.3	少女倶楽部	花は散らず	◎
75	S14.4	少女倶楽部	ぶどう物語	◎
76	S14.5	少女倶楽部［増刊号］	うつくしい余興	◎
77	S14.5	少女倶楽部［増刊号］	金貨	◎
78	S14.10	少女倶楽部［増刊号］	母は強し	◎
79	S14.12	少女倶楽部	空はうるわし	◎
80	S15.3	少女倶楽部	風車小屋の天女	◎
81	S16.2	少女倶楽部	ディヘムの甲冑	◎
82	S16.3	少女倶楽部	乙女よ雄々しくあれ	◎
83	S18.2	中村書店	マライの健ちゃん	◎

【テキスト】

『金子光晴全集』第 8 巻、中央公論社、1976 年

臺大學術期刊資料庫

『金子光晴全集』第 15 巻、中央公論社、1977 年
『婦人子供報知 複刻版』第 4 巻～第 8 巻・第 12 巻、柏書房、2019 年。

【参考文献】（年代順）

暮尾淳「子ども向け読み物について」『金子光晴研究　こがね蟲』3、1989 年。
馬渡憲三郎「表現者の責任――金子光晴における「童話」の位置」『國學院雑誌』92(1)、1991 年。
櫻本富雄『探書遍歴　封印された戦時下の文学の発掘』、新評論、1994 年。
鶴岡善久「離反と放擲――金子光晴の〈責任〉、その他」『現代詩手帖』38、1995 年。
前田均「全集未収録・「反戦詩人」金子光晴の戦争翼賛文――『少年倶楽部』別冊付録所収「見よ、不屈のドイツ魂」」『天理大学学報』186、1997 年。
原満三寿『評伝金子光晴』北溟社、2001 年
中村誠「金子光晴における〈反帝国主義〉と〈大東亜共栄圏〉――「鮫」から『マライの健ちゃん』へ」『昭和文学研究』52、2006 年。
宮澤賢治「金子光晴の童話と白秋」宮澤健太郎編『白秋研究資料集成』第 10 巻、クレス出版、2014 年。
趙怡「金子光晴の未発表作品をめぐって――「支那名剣武勇傳 一、龍神劍。」――」『比較文学研究』101、2016 年。
佐藤卓己『昭和戦前期報知新聞付録集成『婦人子供報知』【復刻版】解題』柏書房、2019 年。

臺大學術期刊資料庫